尋常小學校教師用

修身書

第二

K121.1
1c
2

K121.1
1c
2

大村芳樹 著

音樂之枝折

正編 二冊
續編 一冊

定價 金四拾五錢
定價 金四十八錢
郵稅申受ズ

（文部省檢定濟）

此書ハ著者ガ高等師範學校ニ奉職セシ時ヨリ以後、多年ノ研究ヲ積ミテ初學者ニ會得シ易ク編述セシモノナリ。此上卷ニハ、唱歌教授ノ際、教師ノ心得ベキ音樂ノ理論、音ノ發生 種類 及ビ音樂ノ定義性質ヲ述ベ、其音階調名等ハ、往々物理學上ノ理論ヨリ論及シテ、移調法及ビ拍子ノ事等ヲ詳細ニ論述シ、下卷ニハ主トシテ唱歌ノ教授ヲ說キ、之ヲ遊戲唱歌、單音唱歌 複音唱歌ノ三項ニ分論シ、卷末ニ唱歌ノ教育上ニ必要ナル數件ヲ詳論セリ、今ヤ音樂ノ事タル吾人ノ高等性情ヲ養フニ於テ必須ナルコトヲ世人ハ承認シタリト雖モ、如何セン唱歌ノ技術未ダ世ニ明ナラズ、從テ其教授法モ確定セズ、至快ノ地ニ出デント欲シテ道ナキニ苦メルノ狀アリ、此書一タビ出デテ志アル教育家ハ、音樂自修ノ途ニ就クコト難カラズ、教授ノ方法モ俄ニ優妙ノ術ヲ得ルコト疑ヒナシ。

教育書專賣所 東京神田區柳原河岸十四號地 普及舍

田中登作　校閲　杉山文悟　西村正三郎　村尾壹太郎　合著

● 尋常小學　作文　漢字交文　全四冊　各一冊　定價金十三錢宛　稅郵申受ケズ

田中登作　校閲　杉山文悟　村尾壹太郎　西村正三郎　合著

● 尋常小學　作文　書牘文　全三冊　各一冊　定價金十三錢宛　郵稅申受ケズ

●右ハ、尋常小學科ノ作文用ニ資センガ爲ニ、編著セシモノニシテ甲ハ通シテ每學年級ニ一冊宛、乙ハ第二學年級ヨリ同一冊宛ヲ充テント欲セルモノナリ。

●其編著ノ要旨ハ、第一ニ兒童ノ觀念ヲ言語、文字ニ表出セシメ、次ニ思想ヲ誘發シテ、自ヲ之ヲ構造セシメ、遂ニ之ヲ文章ニ記述セシムルニアリ。要スルニ從來ノ敎授ノ死法ヲ看破シ諸大家ノ作文敎授法ヲ參考シテ新案ヲ設ケ各年級ニ應シテ種々ニ其練習方法ヲ變シ、之ヲ實地ニ適切セシメンコトヲ務メ、又語格文格ヲ正シ言葉美ニシテ實用多キモノヲ撰ビタリ。

●曩ニ弊舍、高等小學作文ヲ出版シ、大ニ世上ノ喝采ヲ得タリシガ、本書ヲ出シテ、始メテ其堅固ナル階段ヲ成功セシモノナリ。

教育書專賣所　東京神田區柳原河岸十四號地　普及舍

尋常小學校教師用修身書　第二

辻敬之　岡村增太郎　同編

明治廿三年九月　普及舍　教育書專賣所

例言

一此ノ書ハ兒童ノ德性ヲ涵養シテ日常ノ作法ヲ教ヘ兼テ愛國ノ道ヲ知ラシメンガ爲内外古今人士ノ善眞ナル言行ヲ輯錄シタルモノナリ

一兒童ニ修身科ヲ教フルニハ談話ニ由リテ教師自ラ言行ノ模範トナラザル可カラズ故ニ此ノ書ハ分チテ教師用ト生徒用トノ二種トナシ教師用ノ書ニハ事柄ヲ掲ゲ生徒用ノ書ニハ其ノ圖畫ヲ掲ゲテ談話ヲ開クノ傍之ヲ目擊セシム又其談話ニ對スルノ格言ヲ載セテ之ヲ記憶セシムルモノトス

一教師用書ノ上欄ニ問答ヲ設ケタルハ教師ガ談話ノ際往往此ノ法ニヨリテ兒童ノ心意ヲ開誘スルニアリ又生徒用書ノ上欄ニ事柄ノ大意ヲ掲ゲタルハ兒童ガ父兄ニ依リテ復習シ若クハ他日自ラ讀誦シテ教師ノ談話ヲ再憶セシムルニアリトス

(一)忠狗瞽主を導く

〔忠義〕

昔し歐羅巴のある都府に年老いて目盲ひたる乞食ありけるが綱にて一疋の犬を繫ぎ其の綱を手にとりてこれを道の案内者とし市街諸處を往來するにこの犬ハ甚利發おるのみならず主人のために深切をつくして曾て正しからざる振舞をおせしことおしての盲人一週日の間に二度同じ町を廻り得意の家の門に立ちて物を乞ふに犬ハ早く其の路を心得て案内し物を

〔問〕人ニ義ハルル者ハ如何ナル義務ヲ盡スベキや

施すおらんとれぼしき家へば軒別に立寄り盲人の物を乞ふ間は其のかたへに坐して休み既に物を得るときハ乃立て又次の家に行き之を待つおと前の如し或は小錢おど投げ與ふるものあるときハ盲人にはおれを探ぐるおと能はざれども犬ハ決して見失はずおれを口に啣みて主人の手に持てる帽子の中へ入れ遂に一度も誤るおとおし或は家の窓より麵包の欠おどを投げ與ふる時も主人より與ふるにあらざれ

ば決して縱ままにおれを喰はずかおらず主人に手渡しおたりと云ふ固より乞食の犬にして充分の養ひを受くる筈おければ常に其の腹は飢ゑたるべきにその心正しくして主人に深切を盡さおと感ずるに堪へたりといふべしもしおの犬の如く行狀の正しきものあれば人といへどもあつぱれの忠義といはるべし

(二)小狗忠孝を全くす　(忠義)

紀伊の國湯淺の里に藤次郎といふ人あり一日

他にゆき路にて子狗の甚あいらしきを見てつれかへり家に畜ひけりしかるにその狗夜ごとにその母のとゐろにゆきてそのかたはらにふしまた魚の肉などを得るときはかならず啣みもちゆきて母犬に與ふその道のほどは凡三町あまりあり藤次郎大にれどろき感じけるが戯にこれをしかりて人の家に犬を畜ふは夜をまもらしめんが爲なり然るに汝我家に畜はれながら夜毎に外にありて已が職業をつとめざる

（同）人ニ仕フル者主人ノ命ニヨリテハ遂ニ孝ヲ廢セザル可カラザルモ將タ他ニ方法ヲ求メテ忠孝共ニ全クセンカ

こそ不忠なれといひけるに犬はその夜よりして隔夜に主人の家と母の畜れし家にふして忠と孝とを完ふしけるとかん犬をらも尚その親を養ひ其の主人を敬ひ其の職分を盡せるとを知るまして人たるもの忠と孝との道を忘れ懶惰放蕩にして犬に劣るの振舞をべからず

格言

君に仕へては忠を盡して我が身を顧みることと勿れ

參照

王達は屯田郎中季曇の僕なり曇罪に連りて獄に繫せらるるに會し獄急迫なり親友と雖問ふ者なし達旦夕飲食を給し伺候せり曇貶謫せらるるに及び達泣て之を送る防者之を過む達曰く我が主人なり豈之を送らざるべとを得んやと後曇憤死し達慟哭父子の如し終に其の喪事を治め佛舍に殯して去る見る者爲に流涕し

(三)車夫親を愛して巡査の惠を得

(孝 道)

東京淺草の聖天町に人力車を挽く者道の傍にうづくまり居れり通行の巡査あれを怪み何事をかし居るぞ速に起てよと言ひけれバ車夫は已むあとを得ずして立てり其の兩脛を見れバともに墨にて染めにけり巡査其の故を問ふ車夫頭を垂れて涙を流し云ひけるは小奴が母は病にて旦夕に迫れどもあれを養ふの術なし些

(同)孝子貧困ニシテ父母ノ爲メ法則ニ觸ルモノアラバ其違ヒヲ諭メン又哀憐ノ心ヲ催サンカ如何

少の車賃も乘客かけれバ得るゝと能はず今夕は如何ともおし難けれバ脚絆を典して飯料に充てんとゝれを質屋に持ち行けりされども業を廢するときは又明朝炊くゝと覺束おし明朝の食を得んとそれバ赤脚にして法に觸れん已むを得ずして斯く爲せり宜しく處置あるべしといひしかバ巡査ハ其の情實を憐み一分の金札を出だし典物を取り返し來れと云ふ車夫悅びて質屋に走り脚絆を取り脚に着くるを見て

巡査は其場を去らんとそれバ車夫は懷より殘金と質屋の書券を取り出だし巡査にかへして深く厚恩を謝したりしに巡査はゝれを取らずして强ひて車夫に與へて去れりとそ車夫の貧しき憐むべし心に法を犯その非を知ると雖其の親を思ふの眞心より斯く爲せしものおらん巡査能く其の情實を汲み違法の罪を蔽ふ兩人の行ひ感ずるに堪へたり

(四)母の貧をいたみて車夫となる

る

（孝道）

東京淺草花川戸町に大竹新兵衛といふ商家あり此の家の丁稚竹次郎といふは性質温順なるを以て主人も之を愛し其の長男幹一の看護を任せれき幹一が小學校に通ふ折は毎に附添はせ側に侍りて萬事の世話をおさしめたるに竹次郎は教師が生徒へ授業をるを見て竊かに之を習讀し殊に脩身學の講義等の時は進みて傍聽をる樣なれば教師も早く之を覺りて感心な

る童子なりと折折物など惠みしあとありしがある時藪入とて主人より一日の暇を貰ひ久しぶりにて其の實家なる本所中之郷原庭町の母親方へ歸りしかば母親は非常に喜びしが餘程の困難と見て菓子さへ買ふて與ふるあと能はざる樣子を竹次郎は氣の毒に思ひ小遣にとて主人より貰ひ受けたる金五拾錢のうち四拾錢を母に贈り此の後は何とかして時時小遣錢を參らをべければ必心配致さるまなどなど種種に

慰め終日遊び暮して夕刻主人方へ歸る時殘りの拾錢を以て菓子麵包を求め之を幹一の土産とせしさへ尋常の小供の爲し得べき事あらぬに母の困難を知りて心を痛めたる故にや氣分わるしとて其の夜は早く寢ねたりしが翌朝何へか出で行き戻らぬより主人は驚きて其の實家は勿論諸處を搜索せしも更に知れざりしかバ痛く心配して其の始末を疑ひ明日ハ其の筋へ屆けて尙ほ尋ねんと打臥せし夜の十時ごろ

竹次郎は雨に濡れて歸り來りしかバ何れも案じ暮せし旨を告げて仔細を問ふに無斷にて外出を爲し御心配を懸けたるは罪多き事あがら申し出でおバれ許しおきゐとと竊に外出せしは昨日藪入に只一人の老母が非常に貧しき體を見るに忍びず項戴せし金子を贈りしが尙ほ此の上も日日僅かづつにても仕送りて老母に心配を致さをまじと思へど奉公の身にハあり且小供の事おれバ錢を得るゐとならねど親を

養はん一心にて人力を挽き稼ぎおバ日に拾錢内外の錢は得らるべしと思ひ立ちしも能く其の事を爲し得るや否や自分にも覺束おけれバ一日試みも上にて出來る業おらバ其のとき御暇を戴き人力挽におらんと今日試みに出でたるおるが客を乘せんにハ營業鑑札を所持せねばおらずされば餘儀なく懇意の者に賴みて一輛の古車を借受け近所の子供等を乘せて終日明地を挽き回し腕腰の力を試したるに少しも

疲勞せず尙二三町の處を走り得べき樣に覺ゆれバ斷然車夫とおりて老母に孝養を致したきこゝろまいと申し兼たれど今日より御暇を賜り且是迄賜ハりし御仕着の衣類を其の儘項戴致したしと他事おき請に主人を始め一同感心し折角の思ひ立ちを妨げんも如何おりと請ふが儘に之を許し外に金錢衣類等を與へけれバ竹次郎は喜びて其の翌日實家へ歸り直に人力車の營業鑑札を其の筋へ出願せんといふを聞き大

行へ出入の者や近隣の人人が協議のうへ金を醵して一人乘りの人力車一輛を買求めて竹次郎に贈るゑとにおりしかば學校の教師も奇特のゑとおりとて修身學講議の際生徒に對して此の竹次郎の行爲を例に引て親孝行を心掛くべしと說きしに生徒等も感動せしものと見に各若干の錢を出し合ひて之を竹次郎に贈りたしと教師へ申し出せしにそ早速同人方に屆けて尙其の身體を愛し其の孝養を怠るゑとおかれと懇ろに諭ぜたりといふ

格言

大學に曰く人の子と爲りては孝に止まる

參照

渡邊子觀は出羽の人おり曾て江戸に至り紀平洲に就て學ぶ鄕信あり父の病を報ず子觀書を捧げて號泣し卽日途に上る時に臘月寒甚し雪を犯して返る病に侍そるゑ

と二年衣帶を解かず父遺言して曰く必業を廢せるゝと勿れと服終りて復遊學せ

(五)鳩蟻相救ふ

(報恩)

一匹の蟻泉水のほとりへ這ひよりて水を飲まんとせるに誤まりてその中へ落入り浮きつ沈みつ苦しみてあわや溺れ死かんとする時岸邊の木の枝に一羽の鳩のとまり居たるがゝの體を見て氣の毒に思ひ木の葉を一枚啄んで蟻の浮きて居る水の上へ落じたり是に於て蟻は大

に力を得て直にその葉の上へはい上り兎角して岸へ流れ付て危き命を助りけりかかるとゝろにゝの家の愛子と覺しきが吹矢を携へて出で來り木の葉の間より彼の鳩を見つけ吹きとらんとねらひを定むる時蟻は突然に愛子の踵に嚙み付きたれバ愛子は驚きて躍り上るに鳩は心づきて飛去りける

(六)良鼠恩獅に酬ゆ

(報恩)

ある時獅子洞の内にて晝寢したりけるに一匹

（問）人ニ恩ヲ施スハ己ノ爲メニモ益アル義ナルヤ如何

の鼠出でてあちらこちら駈け廻るうち計らずも獅子王の鼻の上へ駈け上りけり是に於て獅子ハ奮然として目をさまし矢庭に鼠を引攫みて一ひしぎにひしぎ殺さんとせしが鼠の甚悲しげに叫ぶを見て哀れとや思ひけん拳を開ひて放ち遣りける其の後幾程もあらずしてこの獅子獸を追ふて野を馳せ廻るとき誤まつて狩人の造り設けたる掛罠にかかり大に驚きて逃れんとあがけどもあがけばあがくほど繩ぢま

りて如何とも詮方なく大聲を發して吼ゑ狂ふ時前日放ちたる鼠この聲を聞きて馳せ來り獅子の身に纏ひつきたる繩を嚙切りてこれを救ひ出しける

格言

諺になさけは人の爲ならず

參照

昔の毛寶江に遊びて漁人の一白龜を釣るを見て之を買て歸り瓦盆中に置て之を養

ひ其の漸く大なるを待て江中に放つ後寶豫州の刺史となり石季龍と戰て敗れ江中に陷りしに白龜之を載せて東岸に達せり

(七)堪忍を以て集りたる家族

(忍耐)

唐の高宗皇帝ある時天下を巡見して壽張といふ處に到り給ひしに此の地に張公藝といふ人ありて九代が間家を分たず祖孫父子兄弟姉妹伯叔等大勢の男女一家の内に住みまかも至つて睦み和ぐよし聞ひけれは高宗其の宅へ臨幸ありて主人に問ひ斯る大勢の家族を治めて斯く穩に靜ならしむること何か方便のあることにや奏聞すべしと詔給ふに公藝は何の詞もなく筆をとりて忍忍忍と凡百餘字を書して奉りたりしとなん

(問家爭論ナキハ何ニ因テ然ルヤ)

(八)堪忍の二大人

(忍耐)

明の代の陳白沙といふ人ある時友人の莊定山を訪ひしに其の歸る時定山舟を買ひてこれを

送るに乘客の中に一人の士ありしが其の人滑稽多辨にして縱ままに事を談ぜしかは定山は甚怒り殆ど忍ぶこと能はざりし程なりしに白沙は然らず其の人の談ずる間は其の聲を聞かぬさまにて居り其の人の既に去りし後には其の人を忘たるが如くにてありしかは定山大に其の寛洪に服したりとぞまた同時に毛仲權といふ人あり曹州といふ地の知事となりし時一人の書生ありて書を知事に獻じたるが其の語

傲りて動もすれば謗れるかど多かりしかば僚吏屬官等ハ皆堪ゆること能はざりしに仲權は坦然としてこれを坐に延き慇懃にこれに謝して吾をして平常斯る規言を聞かしめおハ冀くは過失を寡くせべしといひしにそ時の人皆其の大度を稱しあへり

（他人ヨリ誹謗ヲ受クル時ハ如何スルヤ）

格言

讀書錄に曰く忍ぶこと能はざる所を忍べ

富弼の曰く忍の一字は衆妙の門なり

參照

宋の韓琦百金を以て一の玉盞を買ひ之を珍とす吏誤て地に墜し之を碎く坐客驚愕す吏地に伏して罪を待つ琦笑て曰く物の破るる定數あり汝奚ぞ罪あらん

（九）英主蟻を見て感發ス（勉强）

韃靼國のテムールは世に名高き人なり或る時

の戰に敗北を取り獨り身を脫して矮屋の中に匿れたるときふと其の屋の中に蟻の麥粒を壁の上に輸ぶを見るに其の粒を地に墜すこと六十九次なりされども更に屈せる體なく遂に七十次にして壁の上に達するこを得たりテムール王はつくづくとこれを見て思ふやう余今日殆ど心神を失へりされど今此の事を見て再志氣を振ひ起すこを得たり余これを心に銘して終身敢て忘れじとて其の後遂に敵國を打

（同）汝等微虫ノ物ヲ運ヒ或ハ巣ヲ營ミナドシテ百敗沮マザルヲ見テ如何ナル感覺ヲ起スヤ

ち破りてその國を興せりとぞ事をおもに少じく挫折せるとも心を沮せるゝと勿れ精神一たび奮ふときハおんぞ再造に難からんや

(一〇)ヨングの勇

(勉强)

英國の學士ヨングといふ人は常に曾て爲せじゝとハ必ゝれをおし得べしといへり故にヨングはその爲さんと志したるゝとハ何等の難事に遇ふとも屈せしゝとおしヨング始めて馬に乘りし時その同伴せし人ハ騎馬の達人おれバ

〔問〕容易ニシガタキ事ヲナサントスルニハ如何シテ可ナルヤ

ひとたび鞭うつとひとしく路にあたるとゝろの高棚をとびゝしたりヨングはゝのさまを見て我も劣らじと馬を躍らせて飛ばんとしたれども忽地にれちたりしかば再馬にうちのりゝにんとして又れちんとするとき力を極めて馬のたてがみを攫みければ漸くにしてれちず此の如くするゝと三度に及びてつひにゝれをのりゝゆるゝとを得たり凡事業を成さんとするにいかゝる艱難に遭ふともたゆまざるときは

遂に目的の地に達するあとを得べし學業もまたしかりよみ難き書おし難き業といへども間斷おくいく百べんを重ねおば必ずれを遂ぐるあとを得べし

格言

漢の光武皇帝の曰く志あるものは事竟に成る

西語に曰く天下は勉強忍耐なる人の所有なり

參照

唐の李白少年のとき學業未だ成らず業を棄て歸る道にして一嫗の鐵杵を磨くに逢ふ李白之に何を爲すかと問ふ嫗の曰く鐵を作らんと欲すと李白其言に感じ遂に還りて業を卒る

宋の張絳家貧くして未だ書を讀むあとを知らず市家に傭はる會邑官の傳送して過るを見て心に之れを羨み問て曰く何を以て

か此に至るや人の曰く書を讀で此に至るふりと絳乃ち憤を發して力め學び業を伊川先生に受く終に伊洛淵源の學を得れり

(一一)才童雲月を論ず　(才智)

佛蘭西の碩學ペートル、ガセンヂは生れて四歳の時よりよく書を讀み追追成長するに隨ひて山に登り野邊に出でて日月星辰を詠るを以て樂とし往往夜中俄に起きて天文を視るあとおどありある夜同じ年頃の子供兩三人と遊び居たる折じも滿月かがやきて晝の如くあるに薄き浮雲風に吹かれて月の邊を飛びて雲の間に月の走るが如く又月の前に雲の動くが如し子供等はこれを見て彼の動くものは月か雲かといふ爭論を起し皆あロロに動くものは月あり雲ハ靜にして處を移さずといひけれどもガセンヂは獨り說を定めて月も動かざるにはあらざれども其の動くこと人の目に見ゆる程に至らず今彼の動くが如く見ゆるは全く雲の走る

(問)人ヲ論スニハ空論ヲ以テスルト實例ヲ擧グルト孰レガ優レルヤ

に由て斯く見ゆるかりと云へど他の子供ハ其の道理を聞分けず尙も銘銘の說を云張りて屈せざれバガセンヂはやがて一の工夫を運らしてさらバ此方へ來給へとて大木の下に連れ行き其の枝の間より窺はしめしに果して月は同じ枝の間に止まりて動かず實に走るものは雲ぶりけりされバ片意地ふる子供等も此の證據を見て始めて月の走らざるおとに合點往きガセンヂの說に服したりといふ

(一二)甕を碎いて童を救ふ

(才智)

宋朝の名臣司馬温公といへる人幼きとき多くの童子とともに或る家の庭にて遊びたり其の庭中に大なる甕に水をみてたるものありしに一人の童子其の甕によぢのぼりて甕の緣をまわりあゆみてたはむれたりしがはからずも足をふみはづして甕の中に落ちたれバ多くの童子等如何にせんと狼狽に驚々のみにてをくひ

(問)重寶珍器ト人命トハ孰レカ貴重ナルヤ

出をべき工夫とては更におかりけるに温公は手早く大おる石をひろひ來りて其の甕をうちくだかんとしたれば他の童子らまた打驚き之を碎きたらんには主人の怒りにふれおんといふ温公は一の甕をくだくは至つてかろし人の命は至つて重しといひもあへず石をおげうちて甕をくだき溺れたる童子を救ひけるふの温公生長ののち朝廷に仕へて宰相とおりぬかの資治通鑑といへる大歴史は此の人の著述おり

格言

西語に曰く工夫は才知を進むるの階梯なり

参照

魏武帝の子に倉舒と云ふ人あり後に鄧の哀王冲と云ふ少時才氣人に勝れて非常の智あり吳王孫權嘗て巨大の象を武帝に獻ず武帝其の重を知らんと欲し群臣に問ふに衆敢て答ふるものおし倉舒時に僅に五

六歳側に在りて曰く先づ象を船に乗せ船脚の沈む所を記し後物を以て之に積み換へて量らバ容易に知るゝとを得べしと武帝大に悅び之を行ひしと云ふ

(一二三)幼童仁慈履を貧兒に與ふ

(仁愛)

西洋のある國にボールと云ふ童子あり此の童子或時學校に行く途にてショルシホワイトと云ふ小童の木片の上に泣き居たるを見て汝何

(問)汝何ゾ貧ニシテ其心豪

を悲むぞと問へバ我硝子の屑を蹈みて右の足を傷ひたりと言ふボールは其の疵を見て汝の父は履を買ひて與ふる事能はざるかと問ふに我は父母既に沒して今ハ叔母に養育せらるれども叔母には八人の子ある故に履を乞ふ事を憚るなりといふボール云ハく汝叔母の入費を思ひて履を乞はざるハ感ずるに堪へたり今我學校に往く途ゐれバせんかたゐし汝一時頃に我が家に來りゐバ吾汝を助けんと言ひて兼て

見ナル童兒ヲ見バ如何ナル感覺ヲ生ズルヤ

花炮を買はんとて貯へ置ける貨幣を出し今善き用ひ所を得たりとてジョルジと共に沓師の許に往きて美じく堅固なる沓を買ひて與へしかバジョルジの悅び言ふ計りなく成長して後も其の深切を忘れぬ爲とて年年好き梨子を遣りしとぞ

(一四)髮を賣て餓者の命を繫ぐ

(仁愛)

亞米利加のライヲンと云へる町に貧しき女子

(問)汝等貧女ガ父母ノ食セザルヲ憂ヒ餅ヲ竊テ拘引セラレントスルヲ見バ惻隱ノ

ありしがある日市中の菓子店にて餅を竊めり商人怒て警察署に訴へければ警吏直に來り彼の女を拘引せんとせるを人人群り來りて見物せしがラッスといへる少女群衆の中にあり此の有樣を見て深くいみ貧女に事の始末を尋ねければ貧女は涕をれし拭ひ妾が家貧くして父母兄弟はや五六日も絕食に及べり妾今この餅を以て家に遺らんとして斯る辱めにあへりと語りければラッスはその家を問ひ定め我が家

心ヲ生ズルヤ否ヤ

（問）少女國法ノ爲メニ拘引セラレ其一家飢餓ニ迫ルヲ見バ痛痒相關セズシテ可ナラン歟

に歸りしが折ふし父母他行して金を求むるに道かかりしかバ隣家の髢師の許に往き己が頭髪を賣らんとを乞へり髢師常にラッスの髪の美しきを譽め戯れに娘子が髪を賣らんとおらば千金にても買はんといひしが今急にラッスの髪の毛を賣らんといふを聞き怪みてその故を問ふにラッス事の仔細を告げければ髢師大に感じ價よく買ひ取れりラッスはその金を得て一つの籠を求めおれに食物を入れて貧女

の家に尋ね行き彼の父母に對ひて君が家の娘子は今日故ありて歸り玉ハしされども決して心にかけ玉ふまじ妾君が一家の食物乏しきよしを聞きおの食物を持ち來れり僅かおれども一時の飢を凌ぎ玉へといひ籠を與へて家に歸れりラッスが父母早くもおの事を髢師に聞きて大に悅びラッスが歸りを門外に待受けてその仁惠のふるまいを褒め稱へけりおれより人人ラッスの仁心に勵まされ皆爭ふて貧女の家

を恤みけるとぞ

格言

斯邁爾斯の曰く幸福は仁愛より生ず

參照

宋の瞿華鄉善く恩を施し一友あり甚貧し瞿之を憫み白金一鎰を贈る人の知て再び贈り難きことを恐れ窓隙より之を投ず

（一五）虞芮の爭ひ讓に化す（辭讓）

（問）虞芮二國ノ君田地ヲ爭ヒシガ周人ノ辭讓ヲ見テ如何ナル感覺ヲ生ズルナリ

昔し支那に虞芮と云へる二ヶ國ありしがその君互に田地を爭ひて決せざりしかば周の國に訴んとて二人周の國界に入りければ耕せる者は畔を讓り行く者は路を讓り男女道を分ちて行き斑白のものハ物を擔ハずして壯者おれに代りその朝庭に入れバ士は大夫に讓りその禮儀いと嚴かなりければ二國の君感じ入り我等の爭ふ所は周の人おれを愧づ何とてその朝庭に訴へらるべきぞとて互にその田を讓りて取ら

ざりしとぞ

(一六)黒田彦左衛門戰功を人に讓る

(辭讓)

黒田彦左衛門は榊原康勝の臣下かり大坂の役彦左衛門一の甲士を擊ち殪し其の首を斬らんとせし折友人三枝勘兵衛來りけれバ彦左衛門おれを棄てて立去れり勘兵衛後より呼び止むれども聞かざるふりして馳せ行き又敵の一將を擊ち殪せり大坂落城の折康勝病氣にてみまかりけれバ家康公久世廣之坂部廣勝の三人に命じて榊原氏が臣下の功を論ぜしめけるに勘兵衛首級を獻じ兩使に向ひおの首級こそ黒田彦左衛門が獲しものかり彼れおれを棄て去りたり故に臣おれを拾ひ取り候といひけれバ兩使彦左衛門を召しておれを尋ねらるるに彦左衛門更に知らずと對ふるを勘兵衛承知せずして子は嚮きに鎗にて此の敵を殪せり吾後より呼べども子聞かずして棄て去れり故に吾詮方

(問)彦左衛門敵ノ首級ヲ獲友人勘兵衛ノ來ルヲ見テ棄テ去リシガ其ノ棄テ去リシハ如何ナル理由ナリヤ

おく首級を携へ來れり何そこれを知らずといひ賜ふぞといひければ彦左衛門答て吾決して覺ゑなしといふを家康公聞き給ひて深く其の辭讓を褒められけり

格言

王昶の曰く能く讓りて以て得ることをなす

參照

蘇瓊守と爲る乙昔明兄弟田を爭ふ瓊之を諭して曰く天下得難き者は兄弟得易き者い田宅假令ひ田宅を得るも兄弟の心を失へば如何と昔明兄弟泣て罪を謝せ

(一七)脫走の婢を責めず (溫和)

齊の房文烈は怒りしことなき人なり霖雨の時食糧の絶ゑしかば下婢に米を買はしめしがその下婢性質放姿にして何處へか逃げ去り行方知れざりければ三四日も詮索して漸く尋ねあて汝何れの所に往きて食を求めしやといひて

その逃しおとかど問はざりしとぞ

(一八)朝服を汚して顔色を變ぜず

(温和)

東漢の世に劉寛字文饒と云へる人あり性質温和にして常に輕しく物言はず遽てたる顔色おかりしかバその妻試みにおれを恚らしめんと して参朝の折り嚴めしく裝束きたるを伺ひ侍婢にいひ付け肉羮を捧げわざと翻して朝衣を汚さしめしが寛顔色常に異おらず徐に汝が手羮の爲めに爛傷せざりしかといへり

(問)人ノ過失ヲ見バ之ヲ譴責シテ改メシメンカ又寛容以テ之ヲ待チ自ラ過ヲ悟ラシメンカ二者孰レカ可ナラン

格言

西諺に曰く温順は愛敬の母なり

又曰く強暴は笑を招き温柔は已を益す

参照

宋の呂蒙正参知政事たり朝士あり之を指て曰く此の子も亦参政か蒙正佯りて聞か

ざる爲ねして行く同列其の姓名を詰らんと欲せ蒙正之を止め曰く若し一たび姓名を知らば終身忘れず知る無きに如かざるありと

(一九)親に事へて其の心を慰むるを旨とす

(孝道)

寛永の頃雲州松江の城主堀尾家の士に伊達治左衛門といふ人ありけり俸祿薄き士なれども父母に仕へて孝心深く食物には常に鮮けき魚

旨き酒をそなへて父母の心を慰め其の調理も己みづからして敢て奴婢等に任せずされ其の極めて清潔にせざらんことを慮りてありまた其の調理の烹燒きをる折にはかからず父母に向ひて恭しく問ひけるは今日何れの處より某の魚を得候ひぬ如何調理仕るべきや御思召のままに計らハんといふに或時は父は鱠につくりてそなへよといひ母は燒物にして食はせよといふ事などありて其の好むところまちまち

(問)父母ノ命區區ナル時ハ如何スルヤ

（問）身體ノ強壯ハ父母ノ意ヲ慰ムルニ足ルト思考スルヤ如何

かれど治左衛門更に其の意に違ふまとおく一つの魚を半に分ちて父には鱠母には燒物とおきてまいらせるおど何れも其の心に適ふやうに勉めまたわが室へ父母の來らんといふ折はかからずまづ口に適ふべき食物を調へ座を清め茵を設けてしかる後に父母の室へ趣き愉顏にして請ひけるにハ某此の程は格別壯健にして身の肉肥へ膏づきて候ねがはくは慈親某の力量の程を御覽ぜられ候へとて乃まづ父を背

負ひて庭に下り徐かに庭中を散歩したる後まれを已が室に伴なひその後また母を背負ひてまれを伴おふまと猶初の如しまた所用ありて他へ出づる時はかからずまづ父母に見にて其の趣を告げて他所にて見聞きし事おんど打譚らひ父母の心を慰めたりとかやされバ國主堀尾家に於ても深く治左衛門の孝心を感賞せられをりをり鮮魚珍菓などを賜はりて其の父母を慰むるの料に充てしめられしとぞされバ時

の人みなめでいつくしみて國中孝子おきにあらざるも伊達氏の如きはあらずといひけるとぞ

(二〇)親に事へて煩を厭はず

(孝道)

京都の堀川に窮樂といふものありけり其の母老病に臥せりある時客來りて窮樂と次の間にて物語りをるとき暴に雨ふりて堀川の水忽增じて漲り流るる音の高く聞ゆるに老母怪みて窮樂をよびて何の音ぞと問ふ窮樂詳かに其の

由を述べて水音にて候と答ふれば母はさにてあるかと打ちうなづけり窮樂席にかへりて間もなきに母また窮樂を呼びてあのいかめしき音のをるは何ぞと問ふ窮樂謹みてあれハ堀川の水增して漲り流るる音に候と初のごとく答ふれば母笑ひてさにてありつるかと言ふにまたかへりて客に對をれば母また窮樂と呼ぶ聲の中より立ちてゆくに母問ふあと前のごとくこれば母また前のごとく答ふ客あやしみて君は

何とて煩しく屢前のごとく答へたまふぞおにとて前へに申したる如しとハ言ひはおちたまハぬぞと問ふに窮樂頭をふりて否君の御心そへさるてとおれどもしかせぬ故は母老病に犯されて今は聊耄せるさまにおりて唯今問ひつる事をもたちまち忘れて幾度となく問ふふとも皆始めて問ふ心おれば我も始めて問はるる心にて答ふるおりとかたるに客甚感賞したりとぞ窮樂ハ非凡の孝子おり古語にも孝子は志

（問）父母老耄シテ屢一事ヲ問フ時ハ如何答フベキヤ

を養ふといへり母につかへて其の心を縝密の奥にそそぎおれに答ふる一語大に味あり世の子たるもの父母の二たび同じ事を問ふことあれバ動もそれば煩はしとて答へぬものの稀にはおきにあらず人の子たらんものは能く窮樂の心を學ぶべきおり

格言

曾子の曰く孝子の老を養ふや其の心を樂まゝめて其の

志に違はず

參照

晉の王延親に事へて色養を夏ハ枕席を扇ぎ冬ハ身を以て被を温む隆冬盛寒體常に全衣かくして親には慈味を極む

(二一一)溺るるは我が子なり

(陰德)

支那國の高郵といふ處に張百戸といふ人ありけり年既に老いてただ一人の男の子を持ちけりある時張百戸官府の所用にて淮安といふ處へ赴きたるが公事殊の外手間取りて一年あまりも逗留し漸くにして歸り來る途に楊子江といふ大川を渡る折りから大風俄かに吹き出でて舟をやるべくもあらざれバ暫く岸邊に碇泊して風のおぐを待ちしに一艘の舟風の爲に覆されて江中に漂ひけるが其の舷に一人の男とりつきて泣き號ぶ體かるを見て張百戸あはれに思ひあたりに繫ぎたる漁舟をかたらひてあ

(一)人ノ危キヲ救フハ人タルノ務メタルヲ以テ歟將タ自ラ好ムテ爲スモノ歟如何

の舟救へやといへど難風の折ゐれバ我往かんといふものゐし是に於て帳百戸は旅包みの中より許多の銀子を出して漁夫等に示し能く彼の漂流人を救ひ來りしものには此の銀子をとらせべしといふに漁夫等は銀子を見るより忽勇み立ち手に手に舟を押出し風浪を侵して漂流船の許へ漕ぎつけ兎角して彼の男を救ひ來りけれバ張百戸大に喜びてゐれを見るに何ぞ圖らん是れ我子にて父の久しく歸らざるを打

ち案じて迎へにとて來りしゐりけれバゐは思ひがけずとバかり父子手に手をとりかはして其の無事ゐるを喜びしといふ

(一二二)僮を得て子に遇ふ（陰德）

支那國何れの時代にや大學生景生といふ者他郡に流落ひてありし間に家に殘し置きたる一子を惡漢に拐去されしが景は他鄉にありて此の事を知らざりけり偖傭書をるゐと數年にして僅に銀三兩を餘ましたるが偶一窮人の妻を

鬻ぐを見て大にあれを愍れみ慨然として之に贈るに苦辛して得たる金三兩を以てじたれば窮人は夫婦完きあとを得て感謝して去れり明年に至り彼の窮人金を得て持ち來り厚く禮謝して還したれど景ハ猶ほ其の貧からんあとを念ひて堅く受くるあとを肯ぜざりしに夫婦ハ心大に安からず景生の炊煮を親らせるを見て乃一人の小厠を買ひて之を送れりされば景も已むを得ずしてあれを允したれば窮人此の小厠を携へて門に入るに及び之を見れバあは如何に即ち景生の拐されたる子ありしかバ景生は悲と喜とに堪へざりきされバ此の事を聞く者歎異せざるはあかりしとぞ

格言

語に曰く陰德ある者は陽報あり

參照

宋の蕭振浙江に居り平生好みて善を行ふ

江濵の過客時に飄溺の患あるを見る因て巨舟を造り工を募りて人を濟ふ人其の德を頌し其の地を名けて蕭家渡と云ふ後成都の大守とゐる

(一三三)三年訓誡の辭を誦す

(學藝)

晉の趙簡子といふ人子二人ありて長男を伯魯と云ひ二男を無恤といひけるがある時簡子二子の才を試みんとて訓誡の辭を二通書きて二

人の子供に授け汝等兩人よくよく此の辭を讀み覺えよとて與へけりされば二人の子供はじめの程はあけくれこれを讀誦して習ひ覺えんとしたりしが年月を經るに隨ひ伯魯の方は何時しかにこれを忘りて絶えて讀むことをかかりけり扨三年ありて後父簡子二人の子供を招きかねて授けつる訓誡の詞は如何に讀みけん覺えつるやと問ふに伯魯は其の詞を忘れ果てて一字一句も答へをなさず父またさらば彼の書

〔問〕一度授ケラレタル書物ハ常ニ反復讀誦シテ之ヲ記憶センヤ否

付ハいづくにあると尋ぬるに既にあれもら失ひぬ然るに無恤は如何にといふにあれは兄にまさりて賢けれバ言よどみおく其の詞を諳誦したるのみか其の書付をも懐より出してあれを父に呈したりとぞ

(二四)四百篇中一字を遺れず

(學藝)

後漢の世に蔡邕といへる人に文姫といへる娘ありて六歳のとき善く音律を聞きわけたりそ

の父ある夜琴を調べし折その一の絲きれしかば文姫にいづれの絲きれしやと問ふに文姫答へてそは第一の絲ありといへり父訝りて想へらく文姫が言葉折よく當りしあらん故らに又一つの絃をきりて問ふに第四の絲なりと答へたり年二十歳の頃胡兵の爲に捕へられしを魏の曹操文姫が父と知りあひおりしかバ金玉を胡人に與へ文姫が身を贖ひて歸れり曹操文姫に父が遺書は如何せしやと尋ねけれバ文姫の

(問)蔡文姫ガ能ク父ノ遺書ヲ記憶シ居ルハ如何ナル術ヲナシタルニア

いへらく父の書ハ妾が虜へられし折り失ひきされども四百餘篇を覺へたりとて直ちにこれを記して一字も遺さざりしとそ

格言

西諺に曰く記憶は思慮の庫なり

義地活士の曰く才智の均からざるは幼より心思を用ふることを習養すると否らざるとに在り

参照

元の許衡七八歳にて學を鄉師に受く讀書一たび目を過ぐれば忘れず一日其の師に問ふて曰く書を讀むハ何を欲するが爲めなるや師の曰く試驗に應じて及第するに在り衡の曰く斯の如きのみかと師大に之を奇とせ後元に仕へて大學士となり魏國公に封ぜらる

K12.1

尋常小學校教師用備身書第二終

明治二十年二月十日版權免許
仝　年二月五日出版
仝　廿六年八月廿六日訂正九版印刷
仝　年八月三十日發行

（定價金十五錢）

編纂者　故辻敬之
編纂者　岡村增太郎
東京市小石川區春日町五十番地
發行兼印刷者　辻太
東京市神田區柳原河岸十四號地
發行兼印刷所　教育書專賣所　普及舍
東京市神田區柳原河岸十四番地

山名留三郎 辻敬之 増川蚶雄 同著 （月岡芳年画）

錦繪 修身談

三帙　定價一帙金三十五錢　郵税申受ケズ

此書、附錄ニハ、和漢聖賢ノ格言ヲ載セ、本文ニハ、和漢洋古今ノ忠臣孝子等ノ善行ヲ擧ゲ、專ラ德性ヲ涵養スベキ事實ヲ記シ、猶一層兒童ヲシテ、讀デ厭カザラシメンガ爲ニ錦繪ヲ挿入シタレバ、自然ニ修身ヲ誘ク基トナリ、之ヲ讀ム子弟ハ、必ズ善ニ遷リ惡ヲ避ケ、終ニ一家和合ノ最大幸福ヲ得ベキコト、復疑フベカラズ。

辻　敬　之　著

錦繪 修身教場掛圖

全廿五幅　定價一幅金二十五錢　郵税申受ケズ

凡兒童ノ心ニ、完全ナル感化ヲ與フルニハ、聽官ニ任センヨリハ、寧ロ視官ニ依ルノ勝レルニ如カザルナリ、此掛圖ハ和漢洋ニ於テ、仁君、忠臣、立志、孝悌、貞婦ヲ以テ世ニ欣慕セラルル人ノ行爲ヲ、鮮明ナル最上錦繪トナシ、附スルニ略傳ヲ以テセリ、詮ニ果實ヲ見テ、其味ヲ想フト云ヘルガ如ク、之ヲ以テ修身ノ教科用トナセバ其感化ノ遠カナルコト、千載万語ニ勝ルベシ。

教育書專賣所　東京神田區柳原河岸十四號地　普及舍

文學士 井上圓了 著述

●心理學　通信教授

合本全一冊　定價　金一圓廿錢

文學士 平沼淑郎 著述

●經濟學　通信教授

合本全二冊　定價　前編金六十錢　後編金一圓十錢

文學士 平沼淑郎 著述

●論理學　通信教授

合本全二冊　定價　金一圓四十錢

文學士 有賀長雄 著述

●教授法　通信教授

合本全一冊　定價　金一圓廿錢

瓜生寅 著述

●女子家政學　通信教授

合本全二冊　定價　一、金五十錢　二、金八十錢

高等師範學校教諭 野口保興 著述

（文部省檢定濟）

●數理學　通信教授

合本三冊　定價　算數學ノ部　金九十錢　平面幾何ノ部　金七十五錢　立體幾何ノ部　金五十五錢

米國バチエロル、オフ、サイエンス、能勢　桑　著述

●教育學　通信教授

合本全二冊　定價　一冊金八十錢宛

大坂始審裁判所檢事 法律學士 手塚太郎 著述

●法律學　通信教授

合本全二冊　定價　一冊金八十錢宛